

「霜降り肉」の牛 盲目になることも 味と飼い方 揺れる農家

信濃毎日新聞 2011年6月11日(土)

その牛は、額の先で手を振っても反応がなかった。

黒目は焦点が定まっていない。ほかの牛と体をぶつけることも多い。

「盲目の牛です」。ステーキなどの高級食材になる和牛を飼う県中部の50代の男性農家が打ち明けた。

「おいしい肉にしようとするれば、こうした牛が出てしまう」と男性。飼育中の約130頭のうち、1頭が完全に目が見えず、10頭弱は視力低下が進んでいる。こうした牛も人体への影響はまったくないとされ、普通に出荷される。

盲目になるのは、肉に「サシ」と呼ばれる白い脂肪分を入れようとして、牛の栄養が偏ってしまうことが原因だ。

和牛の価格は、サシの入り具合で決まる。多くの農家の目標は、高値で取引される細かなサシが入った「霜降り」の牛を育てることだ。そのため、農家は生後約1年半から数カ月間、ビタミンを多く含む牧草などの餌を抑え、穀物が中心の飼料で太らせる。これがサシを入れるために欠かせない技術とされる。「霜降り」という日本の食文化を支える生産者の知恵だ。

しかし、ビタミンは、視力維持に必要な成分。欠乏がひどくなると盲目になりやすい。足の関節が腫れて歩行に障害が出る場合もある。農家は症状が出ないぎりぎりのラインを模索しながら給餌する。しかし、一部がこうした牛になる危険性は残る。

微妙なバランスの上に和牛生産は成り立っている一。そう表現する農家は多い。

和牛を百数十頭飼育する県北部の40代の男性農家は「消費者が生産現場の現状を知れば、肉を買ってくれるか分からない」と不安を打ち明ける。

この30年間、和牛を出荷する時、牛の背中に"お神酒"を掛けて送り出してきた。自分が生計を立てられることへの「感謝」。そして、高く売るために不健康な姿にさせる「申し訳なさ」。そうした複雑な感情を、牛を出荷するたびに確かめる。

この男性は、食肉処理など多くの中間業者が流通に加わる畜産は「農業の中でも生産者と消費者の距離が遠いと感じてきた」という。

それは、同じ畜産業の酪農でも同じだ。上伊那郡南箕輪村の酪農家、小坂忠弘さん(55)は、畜舎見学に来た小学生が、乳牛から乳を搾る現場を見て以来、牛乳を飲めなくなった、という話を数年前に酪農仲間から聞いて、頭から離れなくなった。

思い当たることがあった。国内では、広い牧草地を確保しづらく、多くの時間は

乳牛を畜舎内で飼育するのが一般的だ。しかし、小坂さんは「多くの人が広い牧草地だけで乳牛を飼っていると思っているかもしれない」。畜舎も小学生の予想以上に汚れていたのかも・・・。

さまざまな考えが頭を巡った。小坂さんは、畜舎の清掃を小まめにして、「恥ずかしくない飼い方」を心掛けている。

消費者が思い描く畜産のイメージと現実のギャップ。そこに農家はおびえている。

信大農学部(上伊那郡南箕輪村)の准教授竹田謙一さん(39)=家畜管理学=が2年前に一般消費者300人余を対象に行ったアンケートでは、「飼い方に配慮された畜産物は値段が高くても買いたい」と答えた人が9割近くを占めた。

竹田さんは「消費者のニーズは農産物そのものにあるだけでなく、その出来上がる過程にもある。消費者のイメージに畜産現場を近づける必要がある」と話す。

畜舎の環境などは生産者が少しずつ改善することは可能だ。しかし、和牛を飼育する農家の多くは「牛が盲目になってしまうのは、『消費者が求める最高級の霜降り』を目指すためには仕方がないこと」とも言う。消費者が望むのは、味なのか、価格なのか、生産過程なのか。すべてを満たすことができない場合は、何を優先すればいいのか。生産者には、消費者の姿が、はっきり見えていない。

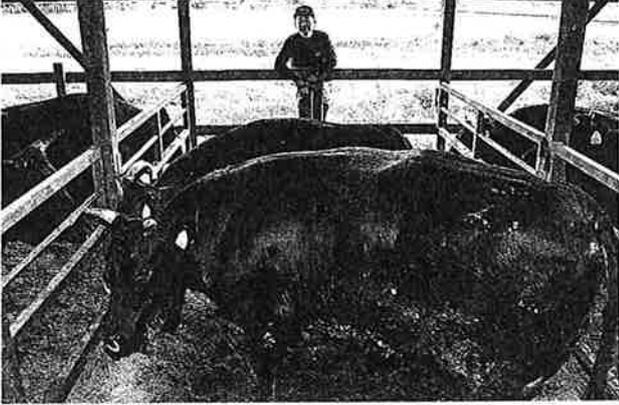
意見等送り先：

380-8546 長野市南県町 657 信濃毎日新聞社編集局「農再生へー自由化時代」
取材班 Fax.026-236-3017 email:agri@shinmai.co.jp

太らせた牛 どうしたら

福島県の農家

放射性セシウムに汚染された稲わらが肉牛のえさになっていた問題で、出荷停止となっている福島県の畜産農家に不安が広がっている。極限まで太らせた牛たちは、この猛暑に耐えられるのか。「牛は工業製品のようなわけにはいかない」。農家の訴えは切実だ。



約850kgに育った出荷直前の牛122日、福島県喜多方市、河合博司撮影

出荷できず飼育手探し

黒毛和牛140頭を飼う南相馬市の小倉敏孝さん(59)は午前8時半と午後5時の1日2回、飼料や牧草を台車に積み、ほぼ月齢別に23の区画に仕切った牛舎を回る。大きく、質のよい牛に育てるため、えさの内容を成長の度合いに応じて変えている。

「いつまでえさ代をけなさないかんのか」。出荷時期を迎えた6頭に向かって話す。出荷停止がなければ、今月中に市場に出すつもりだった。畜産は祖父から数えて3代目。生後30カ月を過ぎた牛を飼うのは初めての経験だ。肉牛は出荷直前、「人間ならメタボな高齢者のような体」にまで太らせる。自らの体重を支えるのがやっとだ。

ビタミンを与えるると肉の色が悪くなるため、出荷の4カ月ほど前からはビタミンを含む配合飼料を減らしてきた。しかし、ビタミンが欠乏すると脚がむくんで倒れやすくなり、失明の危険もある。急ぎよビタミンを多く含む輸入牧草を与え始めた。

「これから1年で最も暑い時期。いつポックリ逝ってもおかしくない。えさ代は月200万円近い。「出荷できない牛は東電(東京電力)や国に買い取ってもらいたい。えさ代などの経費も補償してもらわないとやっていけない」。朝だよ、起きろ」。喜多方市の斎藤栄信さん(56)は午前6時、100頭ほどの黒毛和牛に声をかけながら、わらや飼料をえさ入れに放り込む。しばらく様子を見ていた表情が曇った。「腹が張ってんな。脚がむくんでてる」

てやせ始めた。「腸に、脂肪の腫瘍ができたんじゃないか」。診断した獣医師は「早く出荷したほうがいい」と言葉を詰まらせた。「どうしようもねえ。サシの入った(脂肪が付いた)、いい牛から弱っていく」と斎藤さんは嘆く。

農協からは1通の文書が届いた。送風機で牛舎内の気温を下げ、水やビタミンを十分与える。対策の文面を見て「そんな簡単なもんじゃねえ」。

1頭100万円前後で売れるはずの牛に死なれては元も子もない。毎日夜まで何度も牛舎を見回る。「命あるものを人間が頂くんだ。安心して食べてもらえるようにしてほしい」(辻岡大助、三島豊弘)

全頭買い上げ 県が国に要請

出荷停止の事態に、福島県と関係者らは危機感を募らせる。佐藤雄平知事は26日、畜産関係団体の代表らと連名で、県内の肉牛全頭を国が買い上げるよう求める緊急要望書を菅直人首相に出した。

国は汚染された肉だけを買い取る方針を決めている。県の災害対策本部会議では県幹部が一安くしか売れないというレベルでは

ない。出荷期間を過ぎた牛のかなりが死ぬ」と訴えた。

県内の肥育農家は、出荷停止前日の18日時点で314戸。計画的避難区域と緊急時避難準備区域の33戸で4096頭、両区域外の281戸で2万5955頭を飼育する。

県や畜産団体は20日、ワーキングチームを立ち上げ、牛の扱いに関するマニュアル作りに着手した。

県農業総合センター畜産研究所の遠藤孝悦所長は「太りきった牛を飼いつつ経験がだれにもない。データがなく、指導は難しい」と話している。



アニマルウェルフェアに ついての一般消費者の意識

2009年10月に開催された「第3回東京都食育フェア」に出展しました。会場は日本農業大学に隣接する広場で、主な来場者は地域の住民と食育に関心をもつ消費者の方々だったと思われます。この場で日本獣医生命科学大学の永松先生の教室と協力して家畜福祉に関する消費者アンケートを行いましたので、その結果をお知らせします。アンケートに回答いただいた方は672名でした。

調査対象者の年齢構成 (%)

10代:47人(7.0) 20代:129人(19.2)
30代:142人(21.1) 40代:132人(19.6)
50代:80人(11.9) 60代~:76人(11.3)

無回答:66人(9.9)
合計:672人(100.0)

畜産動物の認識

畜産動物を実際に見た人は9割で、乳牛、豚が6割以上で、肉牛、採卵鶏、ブロイラーは4割でした。また実際に畜産動物を見た場所は、観光牧場、農家、大規模畜産施設、動物園、畜産試験場、自宅の順となっています。

動物福祉への関心

「動物福祉に対して関心がある」との回答は約4割、「どちらでもない」が約5割でした。「どちらでもない」という回答は「わからない」と同じ意味だと考えられます。また「畜産動物を見たことがある」との設問と「動物福祉」への設問の間には相関性はなく、年代別や性別にも差がなく、どちらも独立しているようです。

畜産動物の飼育方法の認知度

牛

牛の福祉の観点から問題となる飼育方法について質問しました。

- 尾の切断: 知っている→9.6% 知らない→90.4%
- 鼻環: 知っている→38% 知らない→61%
- 大量の穀物投与: 知っている→29% 知らない→71%
- 繋ぎ飼い: 知っている→21% 知らない→78%以上
- 除角: 知っている→21% 知らない→78%。

■ 病気と抗生物質の投与:

知らない→71% 知っている→28%。
いずれの項目についても「知らない」消費者が8割で、「知っている」消費者は2割程度でした。

豚

豚の福祉の観点から問題となることを質問しました。

- 尾の切断: 知っている→11% 知らない→88%
 - 歯の切断: 知っている→11% 知らない→92%
 - 麻酔なしの去勢: 知っている→11% 知らない→92%
 - 狭い畜舎での過密飼育: 知っている→32% 知らない→67%
 - 病気と大量の抗生物質投与: 知っている→25% 知らない→75%
- 豚に関する問題点は、牛以上に認識されていないことがわかりました。

鶏

採卵鶏と肉用鶏を鶏としてまとめた上での福祉上の問題点を質問しました。

- くちばしの切断: 知っている→12% 知らない→87%
 - 一定期間の絶食: 知っている→8% 知らない→91%
 - ケージ飼育: 知っている→40% 知らない→59%
 - 病気と大量の抗生物質投与: 知っている→29% 知らない→70%
- 鶏に関しては、採卵鶏のケージ養鶏は知られていても、くちばしの切断(デビーク)などはほとんど知られていません。

消費者の望むこと

このアンケートは消費者に畜産動物の飼育実態を知ってもらうこともかねており、そのうえで、消費者として望むことは何かを尋ねました。

「消費者にもっと畜産動物の飼育の現状を知らせてほしい」が64%と最も多く、

続いて「食用に殺される動物であっても生きているときはやさしく飼育してほしい」が58%、「動物が過度のストレスで病気になるないように、動物福祉に配慮してほしい」54%の順となりました。

しかし、有機農産物の表示のように「動物福祉農産物」の表示をしてほしい」は31%、「生産から消費にいたるトレーサビリティができるようにしてほしい」も43%でした。消費者は「動物福祉農産物」や「トレーサビリティ」に関してはまだまだあまりなじみがないように考えられます。

価格に対する許容範囲

家畜福祉を実現すると畜産物価格が上昇することが考えられますが、その価格上昇の許容範囲は、「1.1~1.2倍程度まで」(31.1%)、「1.3~1.5倍程度まで」(31.1%)、「1.5~2倍程度まで」(16.8%)でした。ある程度価格が上昇しても家畜福祉に配慮した畜産物を購入したいと考えている傾向が強いです。

畜産業の方向性

最後の設問として、家畜を飼う産業で、何を大切にしたらよいと考えるかを尋ねました。その結果、「価格と家畜の福祉のバランスが大切」が85%と大多数でした。もっと積極的に「価格が高くなっても家畜の福祉を大切にすべき」は10%でしたが、反対に「家畜の福祉よりも価格を重視すべき」はわずか1%にすぎませんでした。

以上、一般よりやや食べ物や動物に関心がある消費者においては、家畜福祉の情報を提供することで、急速に家畜福祉に関心を持ち、理解を示すと考えられ、今後は家畜福祉食品にも大きな関心を持つようになると考えられます。

情報提供の重要さがわかるアンケート結果となりました。